



ホーチミン市 市街風景



特集1



若手後継者が見た経済新興国ベトナムの実情について

～後継者育成研修「経営リーダー育成塾」のベトナム経済視察報告～

《ベトナム経済視察の概要》

1) 目的

- ①アジアの新興国ベトナムのモノづくり、マーケティング等、ビジネス環境の実情視察
- ②本県からの進出企業、工業団地、物流、商業施設等の視察
- ③ベトナム進出企業経営者、駐在員等との交流、情報交換

2) 日程・主な視察先

①期日：平成21年3月10日（火）～14日（土）【3泊5日】

②訪問地、視察先

- ☆ハノイ市（・タンロン工業団地
・マニーハノイ社（マニー(株)の現地法人）
- ☆ホーチミン市
（・ロジテムベトナム（日系物流法人）
・TANOISEEBEST社（(株)TANOIの現地法人）
〃（・日本語学校「KAIZEN」
・ベトナム・シンガポール工業団地 他）

3) 参加者

- ①経営リーダー育成塾研修生 5名（第1期生 3名、第3期生 2名）
- ②経営リーダー育成塾アドバイザー 1名、事務局（振興センター職員） 1名

4) 旅行主催

(株)アイ電子工業（大田原市）

視察の報告会については、去る8月22日（金）に今年度の経営リーダー育成塾OB研修（第1回目）の講座として、「とちぎ産業交流センター」の「特別会議室」において開催しました。

参加者全員が報告書に基づき、視察の感想等について報告を行いました。

本号では、その内、視察団長を勤めました「小金 幹典氏（(株)小金建設代表取締役）」並びに経営リーダー育成

塾アドバイザーの「戸張 真氏（(株)日本能率協会コンサルティング 顧問・シニアコンサルタント）」の両名の報告書を掲載しました。

☆研修生の視察報告

株式会社小金建設

小金 幹典（第3期生）

3月10日（火）
本日から経営リーダー塾のベトナム

研修である。今回初めて高速バスで成田に向かうことにした。いつも車で行く時に煩わしさを感じていた荷物の積み替え、乗り換えもなく、とても快適であった。成田空港でメンバーと合流し機上の人となり6時間半後ハノイに到着。空港から最初の視察先である住友商事の運営するタンロン工業団地へ向かう。

現地について驚いたことはその大きさである。70%完成で59万坪という広大な土地にパナソニック、キャノン、ヤマハ等の日系企業が84社進出していた。駐在員の方の説明では、ベトナム人の就業意欲はとも高く、企業説明会のフェアに数千人の学生が参加する。日本との差に驚きである。

3月11日（水）

研修2日目は、経営リーダー塾に塾生を輩出しているマニーのベトナム法人「マニーハノイ」の視察である。会社の運営は日本から社長として1名のみがベトナムに駐在し、求人をはじめほとんどの業務をベトナム人の社員が行っていた。現在建設中の工場の現場を視察。ベトナムはとても地盤が強く、建設工事費も安価のため進出企業にとって大きなメリットであろう。



マニエーハノイ工場視察

視察後、空路にてホーチミンに移動。ホテルに向かう途中で全員がベトナムのマンパワーに驚愕した。どこを見てもバイク・車の大渋滞である。そして市民が平均年齢26歳と皆若い！

3月12日(木)

視察の目的のひとつである、ベトナム政府系機関、ホーチミン市工業団地管理委員会（HEPZA）に表敬訪問をする日である。管理委員会副部長のPHUOC氏から日越交流の経緯や日本企業進出に対する期待をお聞きした後、塾生から中小企業の進出に関する質疑をする等、活発な意見交換が行われた。

HEPZAを後にし、鈴木ブレンシオン様にご紹介いただいた日本語学校KAIZENに訪れた私たちは、ここでもベトナムの力強さを体験すること



日本語学校 (KAIZEN) 視察

になる。一流大卒の15名が、ベトナム国家ため、日本の技術を習得したいという夢に向い、必死に日本語を学んでいた。日本がベトナムに追いつかれる日がそう遠くないことを感じた瞬間であった。

この日の夕食は、鹿沼から進出している田野井社長の計らいで、KAIZENの教員の方や地元建設会社社長との交流会を開催することができた。より深くホーチミン市の現状を知ることができた有意義なホーチミンの夜であった。(ベトナムにもカラオケがあった。)

3月13日(金)

今日がベトナム視察最終日である。先日お世話になった田野井社長の「タノイ・シーベスト社」があるV S I P

工業団地を訪問。この工業団地は日本人の駐在員が2名いるベトナムで唯一の工業団地である。田野井社長自ら、タノイ・シーベスト社について設立の経緯を伺った後、新工場を見学させていただいた。日本では考えられない安い費用で土地の取得、工場建設をされていた。また、資材の仕入れにもかなり工夫されており田野井社長の経営戦略の素晴らしさに、視察団は感銘を受けたのである。

今回の視察により、日本企業が国内だけを視野に入れていく経営に限界があることに気づきました。また、新興国とのつき合い方により、日本経済が左右される時が目前に迫っていることも肌で感じる事ができ、とても有意義なベトナム研修になりました。



TANOI SEEBESEST視察

今回は、ビジネスの具体的なテーマを設定し再度訪問したいと考えています。

☆アドバイザーの視察報告

(株)日本能率協会コンサルティング

顧問シニアコンサルタント

戸張 真

ベトナム・ハノイ着、14:30(現地時間)。日本との時差は、2時間程度。

空港に着き、外に出るとムーっという熱気。やはり日本よりは暑い。

空港からバスでハノイの町中に出ると、まず人の多さ、オートバイの多さに驚かされる。

バスからのハノイの風景は、私が30年前に、約1年間滞在していた台湾の農村地区に似ており、懐かしさもあつたが、ベトナムも台湾と同様に、これから急速に発展していくのだという印象を持った。

発展途上国の状況は、台湾にしろ、韓国にしろ、中国にしろ、どこを見ても人々が早朝から、夜遅くまで良く働き、発展への活力を感じる。ベトナムにおいても、同様にその活力に圧倒された。



今回の視察旅行は、時間的制約はあったものの、工業団地、企業等の訪問、また現地の経営者の方々との交流を行い、日本企業のベトナム進出の可能性については、多くのチャンスがあるなという感触を得た。

ただ、進出に当たっては、単に、ビジネスということだけでなく、進出することが、ベトナムに対して、またベトナム人のためにどの様な価値を提供できるのか？を考える必要があるなということを感じた。



タンロン工業団地 視察

日本とベトナムは、文化・国民性も比較的日本との共通点がある。また、日本が抱えている課題とベトナムが抱えている課題の補完関係もあり、今後、いろいろな面で、政府、また、企業間の協力により解決できることが多くあるなという感じを深くした。

また、日本の製造業は、ものづくりを軸に、現場中心の展開を進め、一見、成功をおさめている様ではあるが、ベトナム進出の企業訪問の中で、改めてマネジメントの重要性を感じた。

今後、日本企業のグローバル展開に際し、そのやり方についても考えていく必要がある。



平塚社長様を囲む交流会

今回、私を含め、視察に参加した人は、その多くが、ベトナムは初めてという状況であり、多くの刺激を受けた。

しかし、その刺激は、日本に帰ってくると日常の仕事に追われ、徐々に覚めてしまいがちとなる。

早い時期に、ベトナムでの刺激を再考し、今後の展開にどの様に取り入れて行くかを考え、計画に落とししていくことが大切である。

年に一度位は、海外に出る機会をつ

くり、多くの刺激を受けることも必要であろう。

3泊5日の短いベトナム視察、ベトナムの若者の活力に圧倒され、日本に戻った。

日本も、これから、新たな目標を持ち、グローバルを視野に新たな挑戦をして行かないと周辺諸国に追いつかれ、



TANOI SEEBESEST新工場視察

追いつかれてしまう。

最後に、企画・アレンジし、同行戴いた株式会社アイ電子工業の佐藤弘子さん、また現地での視察にご協力いただいた公的機関、企業の方々に御礼を申し上げ、ベトナム視察旅行の感想としたい。



ホーチミン市内 中心部 交通渋滞

ベトナム ミニ知識

- ベトナムはドイモイ（刷新）の旗印の下、市場経済への移行後、目覚ましい経済発展を続けています。
海外生産拠点の中国一極集中リスクを回避する「チャイナ+1」として日本企業を含め世界の企業がベトナムに注目し、進出を図っています。
- ベトナムは、30歳代以下の人口が50%以上を占めており、その国民性も「勤勉」、「手先が器用」「忍耐強い」などがあげられ、若くて優秀な人材が確保しやすいと言われています。進出している日本企業などからもビジネスパートナーとして高い評価を得ています。
- AFTA（アセアン自由貿易協定）、ACFTA（アセアン中国貿易協定）など地域経済統合により、関税が一部の国を除き撤廃される2010年には、ベトナムを含めて人口18億5千人、3兆ドルの経済規模を持つ巨大な自由貿易地域が出現することが予測され、新たなビジネスチャンスを得る市場として期待されています。